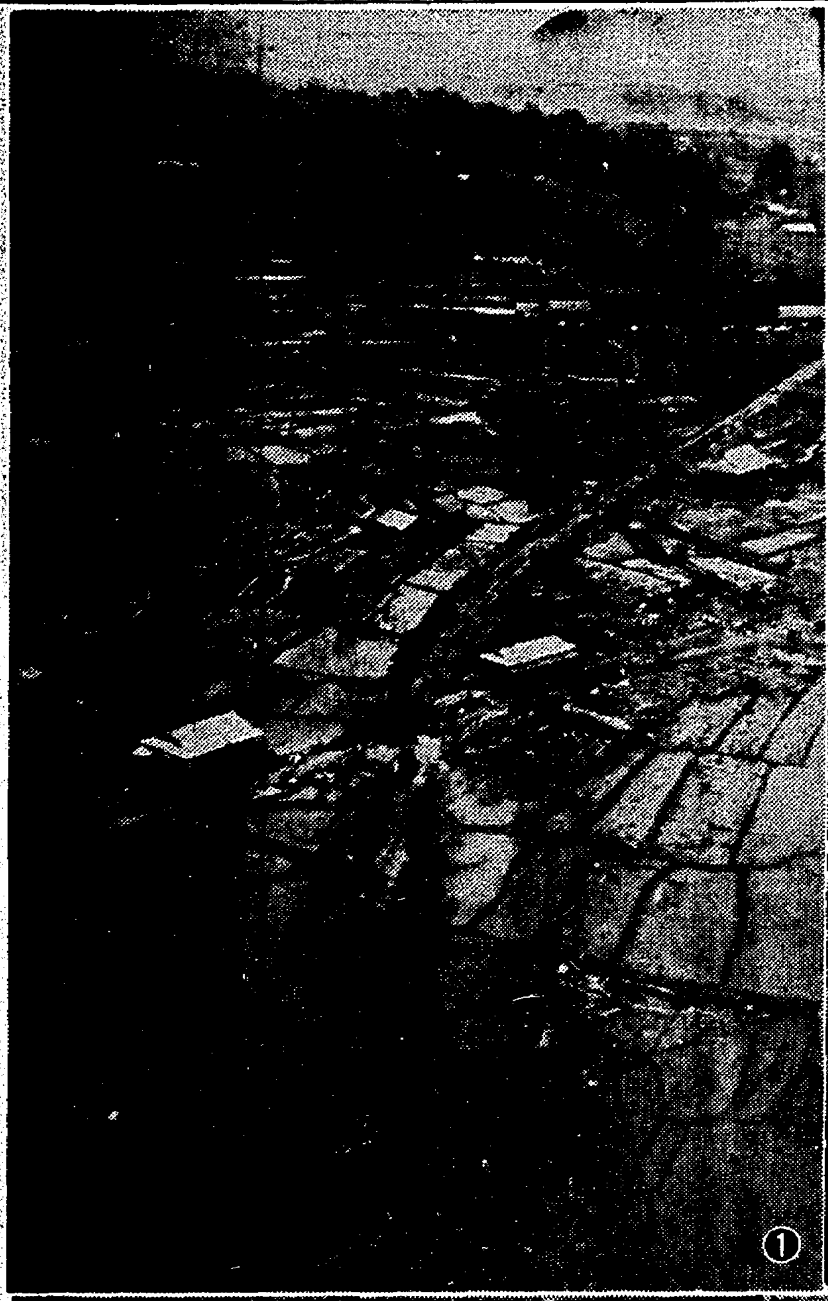
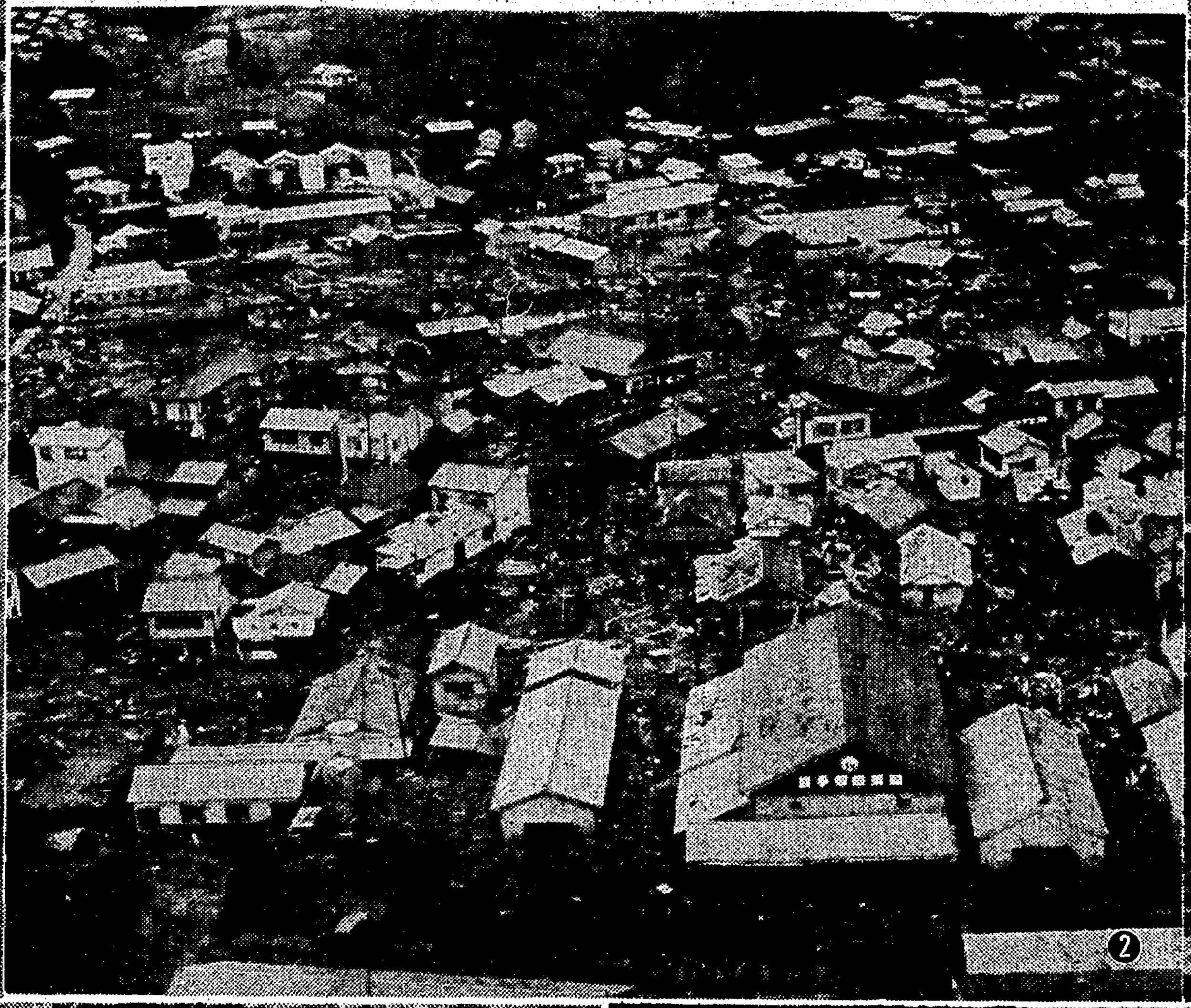
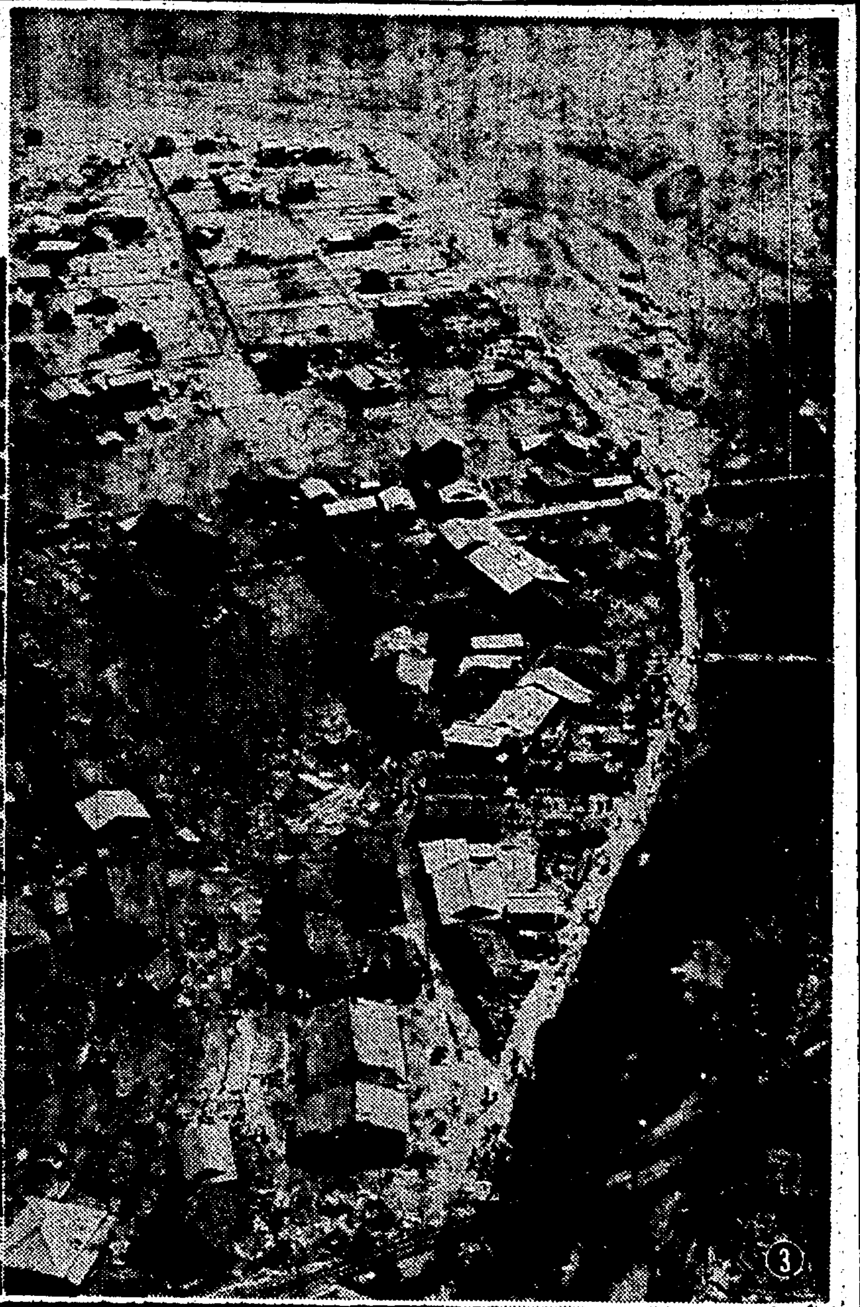
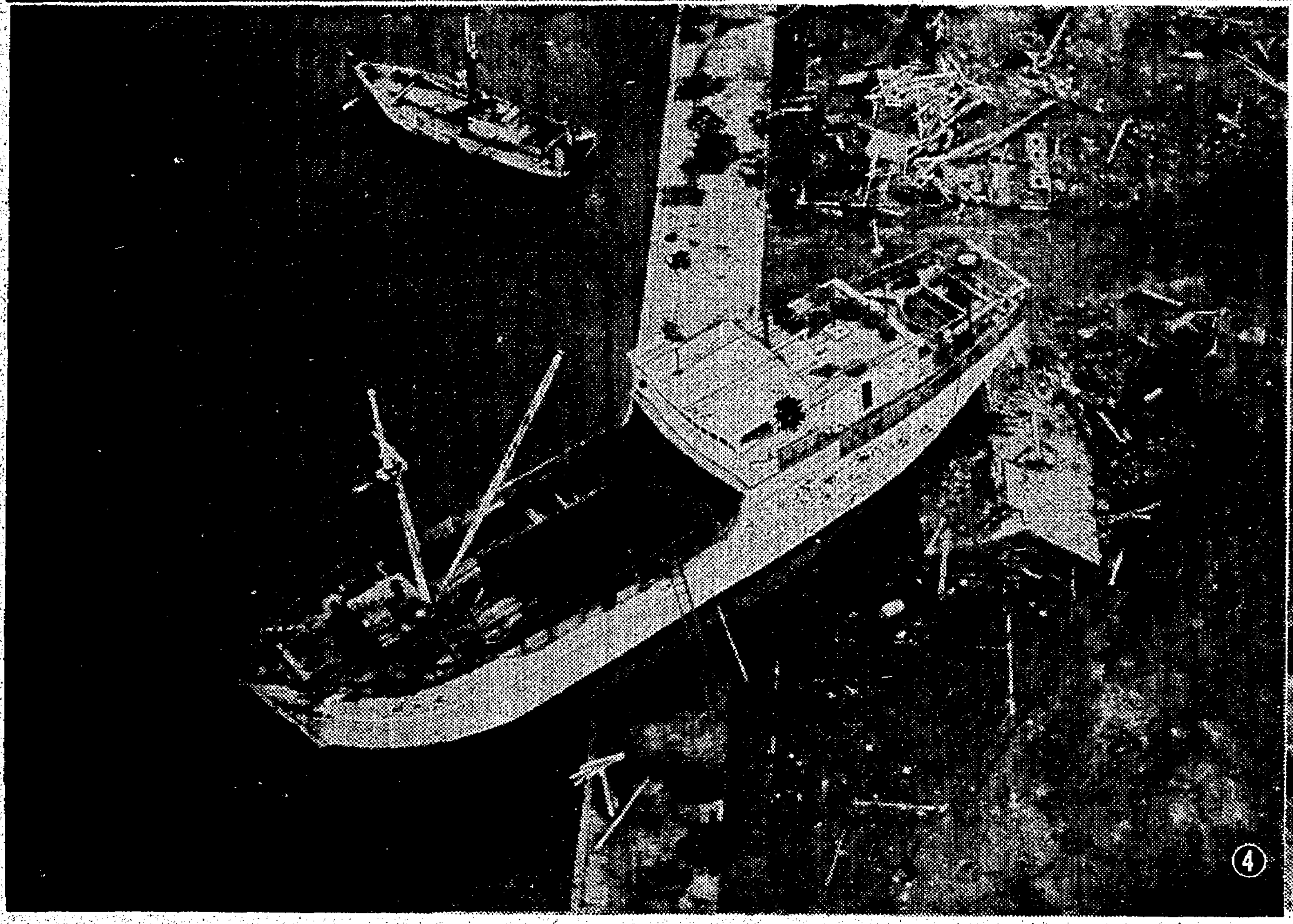
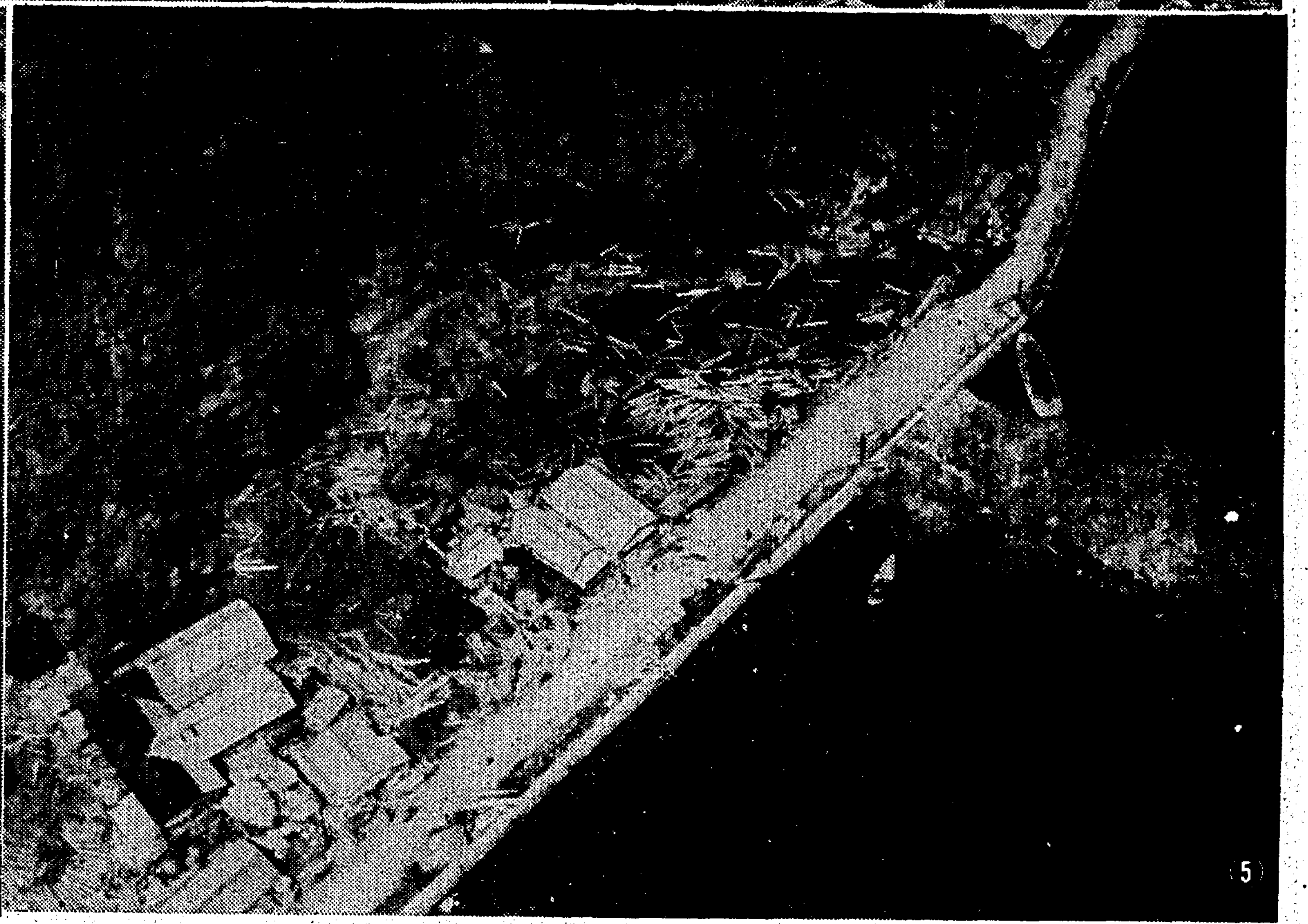
空から見る津波の傷跡


①


②


③


④


⑤

良港、一変するむごさ

海に浮かぶ屋根、ずたずたの鉄道

絶望から立ち上がる

【東野記者、紫田写真記者発】三陸沿岸一帯を襲った大津波の被害状況調査に二十五日岩手郡滝沢村一本木の陸上自衛隊岩手駐とん地から茨城県土浦の第一ヘリコプター隊第一飛行隊のヘリコプター二機が県北、県南班に別れ小川副知事、吉岡総務部長ら県関係者と報道関係者を乗せて飛び、空から県下沿岸各市町村の被害のあとを視察した。海に浮かぶ屋根、水田に打ち上げられた漁船、ずたずたの鉄道・道路など、生々しい津波の傷跡が随所に見られた反面、屋根には色とりどりの衣類が干され、庭先いっぱいにたたみが並べられ、残材の整理に白いエプロン姿で働く婦人会員、黒アリのようにたくましく働く自衛隊の応援部隊など被災地のたくましい復旧の意欲が見受けられた。

○…午前八時一本木駐とん地を飛び立ったヘリコプター二機は巨大なプロペラをそろえて緑濃い山々をひとまたぎに四十分後には宮古上空にはいった。県南班は小川副知事、宮原衛生課長、藤森農委課長補佐、県北班には吉岡総務部長、菊池世話課長、小田代農委課長補佐が乗り込み、窓越しに次々と展開する津波の傷跡を追う。

すさまじい高浜付近

○…高度百メートル。細長く陸地に深く食い込んで宮古湾内の高浜、金浜周辺はルリ色に輝く太平洋とは打って変わってにぶい黒灰色で、イソづたいには無数の木材、板切れなどが浮かんでいる。白い航跡を引いてなにかを懸命に引っぱっている漁船――よく見ると引いているのはトタンぶきの屋根だ。そのあたりに家屋の柱や叉木と思われる角材が散らばり屋根の上にマワシ一つの男がロープをにぎっている。湾内いたるところにカキだながひとかたまりになり、波間に浮かぶ。海岸から約一キロはあろう、水田には十五トンほどもある漁船が横倒しになり、手がつけられぬまま放置されている。高浜付近では山田線もレールがゆがみ、マクラ木には木片らしいものが乱雑にかかっている

大船渡ひどい被害

○…ヘリコプター二機は山田湾から南と北にコースを変え、県北機は宮古に折り返し、田老、田野畑普代、野田、久慈を経て八戸に。県南機は釜石、三陸、大船渡陸前高田を高度百メートルないし百五十メートルの低空で飛んだ。今回の津波は南米チリ沖の大地震の影響でおもに宮古以南の南東に湾口を向けたところが最もひどい被害を受け北東に湾口を向ける宮古以北の各地は被害が比較的少ないのがわかる。しかも金華山沖周辺の地震による津波は波数が小さく湾内のふところ深い大船港などはこれまで被害を受けたことはなかったが南米チリから地球を半周した津波は波のうねりが大きく、陸地に細くはいり込んだ広田、大船渡などの各地が逆にひどい被害を受けているのが特徴だ。

ウミネコの乱舞のみ

○…宮古からリアス式の海岸線に沿って南下した県南機は起重機もへし曲がった鉄都釜石市の被害地を過ぎて死者五十三人を出した大船渡、陸前高田両市にはいる。大船渡では湾口から五・五キロの細長い形に深い入江、特徴ある大船渡湾がのぞまれた。湾の南側にある大船渡、下船渡、細浦の各町、湾北側の赤崎町とも原形を一変するむごさ。湾をかこむ町々は海岸近くまでせり出した山にかこまれ、わずかの平地にへばりつくように密集しているだけに、津波は木造家屋をウキのようにプカプカと浮きあがらせ、海に引き込んのだろう。

大船渡魚市場周辺の家屋はコンクリート造りの冷蔵庫や土台のしっかりした建物しか残っていない。魚市場わきの大船渡造船所もあんなに密集していた作業小屋、材料置き場がほとんどなく、一夜に小学校のグラウンドが幾つもできたよう。修理中の木造船だったのか三、四十トンはあろう機帆船が二隻お互いに寄りかかるように傾斜し赤腹を苦しげにのぞかせている。

県下総生産高の七割を占めるといわれる自慢のカキだなも細浦湾頭近くに押し流され、押しつぶされている。魚市場周辺は海か陸か判別のつかぬほどただよう木片の群れ。廃墟の町に群れ遊ぶウミネコだけが初夏のやわらぎを告げていた。

たくましく復旧へ

○…景勝地高田海岸を越えると大きく口を太平洋に向けた広田湾にはいる。高田松原の木々の緑が写ったが、松原内に並んだ数十軒のみやげ品売り場は横倒しになったり、あるいは屋根だけあって柱がない。堤には大穴があいているのがはっきり見られ防潮林として天下に誇る高田松原さえ今回の津波には抗しかねた。松原に続く脇ノ沢では白いエプロンの婦人たち四、五十人がせっせと残材の整理にアリのように働いていた。大船渡では自衛隊員の応援作業が見られたがいずれも力強い復旧のいぶきだ。

高田松原の後方にひかえる水田は潮をかぶってそのうえをウミネコが乱舞している。田植えをひかえて潮をかぶった田は塩害に悩まされ、ことしの稲作は心配だ。水田にはどこにも人影が見られない。わが家の復旧に人々は懸命なのだろう。白い線を引いて切れ切れに続く大船渡―陸前高田間の二級国道、築堤から根こそぎ持ち去られた国鉄大船渡線ことに同線脇ノ沢―小友間は路線から脱落し、水田に突っ込んだレールとマクラ木。大船渡町付近では民家がレールの上にデンと乗っかり、ここが鉄道路線かと疑うばかりのさんたんたるものだった。

沖合いは初夏の太陽がキラキラと照り輝き、白い波頭も見当たらない。この潮がどうしてこんなに無惨ないたずらをしたものかと自然の猛威をいまさら知らされた思い。それにしても人間は自然の猛威にかくも弱いものだろうか――被災者の涙も今度限りで繰り返さぬためにも恒久対策が望まれる。機は大きく旋回し「ひどいなあー」の声とともに、一日も早い復興を祈って帰路についた。

①陸前高田市米崎町地内では大船渡線が踏切から切れ、西側に六、七十メートルも移動している。
②大船渡魚市場から浜町にかけて破壊された民家が多く、あき地や道路は折れた木材や破損した家具で埋まり、臨港線では転覆した貨車も見られる。
③大槌町大槌川口付近は家屋の土台石だけが残り、町の面影はなくなった。
④大船渡魚市場近くの岸壁には三百トン級の機帆船が乗り上げている
⑤山田町織笠地区では、二級国道を越えた津波が製材所の土場に押しよせ、貯木はマッチの軸木のように土場一ぱいに散らばった。

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。